



スポット企画展

児童文学者

鈴木喜代春 没後10年展

11月1日(日)～12月7日(月)

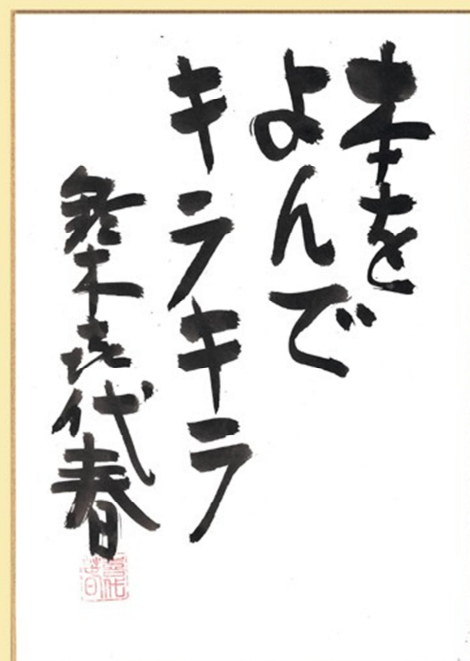
弘前市立郷土文学館

【開館時間】9:00～17:00(入館は16:30まで)

【観覧料】一般100円、小・中学生50円

(弘前市内の65歳以上、市内の小・中学生、市内の外国人留学生、市内外の障がいのある方、ひろさき多子家族応援バスポート持参の方は無料)

〒036-8356 青森県弘前市下白銀町2-1(追手門広場内)
TEL 0172-37-5505 FAX 0172-36-8360

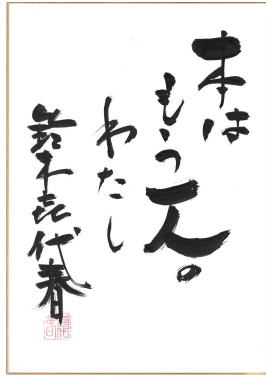


鈴木喜代春 色紙



鈴木喜代春

青森県近代文学館 提供



鈴木喜代春 色紙
「本はもう一人のわたし」

昭和15年、喜代春は、青森市にあった青森県師範学校に入学。太平洋戦争が始まると軍事教練、開墾作業が頻繁に行われ、体が小さく体力のなかった喜代春は教官に怒鳴られてばかりいました。どんなに頑張っても「またまたスズキ」と厳しく怒鳴られ、悲しい思いで日々を送りました。

そんな喜代春を支えたのが「本」でした。戦況が悪化していく中、「戦争で死ぬ」恐怖から救ってくれたのも本でした。寮の先輩が貸してくれたヘルマン・ヘッセの『青春彷徨』を読んでいた時、喜代春は、魂を求めて彷徨する物語の中に「もう一人の自分がいる」とことを発見します。

鈴木喜代春は、大正14年に青森県南津軽郡田舎館村に生まれました。昭和27年に刊行した黒石町立黒石小学校4年生の生活記録『みつばちの子』が反響を呼び、日本の生活綴方教育史に大きな足跡を残しました。

昭和29年、喜代春は千葉県松戸市に転じて小中学校に勤務する中、子どもたちに知識だけではなく「人間」の姿を伝えようと物語教材を創作。昭和37年、小作農民の根源的な苦悩を背景に、懸命に生きようとする北国の子どもを描いた『北風の子』を刊行します。その後も、高度経済成長のひずみである「公害」をテーマとした『二つの川』(46年)、北辺の農村の過酷な環境の中で必死に生きる人間の姿を描いた名作『十三湖のぼば』(49年)など、次々と作品を書き続けました。

昭和50年代になると、学校では「偏差値絶対」の傾向が進んで「落ちこぼれ」という言葉が生まれ、子どもたちの「人間」が奪われていきます。この風潮を嗅いだ喜代春は、学校に「人間」を取り戻すという信念のもと、『加木九太郎校長先生』(54年)を皮切りに、「ダメな子シリーズ」(56年～63年)などの〈学校もの〉を数多く書き上げます。

そのほか、伝記的作品や民話・民謡を物語にした作品も手がけ、昭和62年刊行の『津軽の山歌物語』は第12回日本児童文芸家協会賞を受賞。平成17年には『けがづの子 生命をつづる津軽の詩』を刊行するなど、平成28年に90歳で世を去るまで数多くの作品を書き続けました。

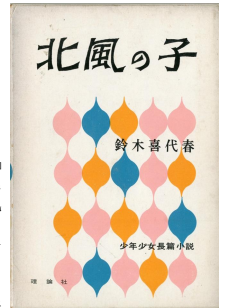
本展は、教育に「人間」を取り戻すという信念のもとで書き綴られた、児童文学者・鈴木喜代春の代表的な作品を中心に紹介するものです。



『津軽の山歌物語』 国土社
昭和62年12月30日
第12回日本児童文芸家協会賞受賞



『二つの川』 ポプラ社
昭和46年7月15日



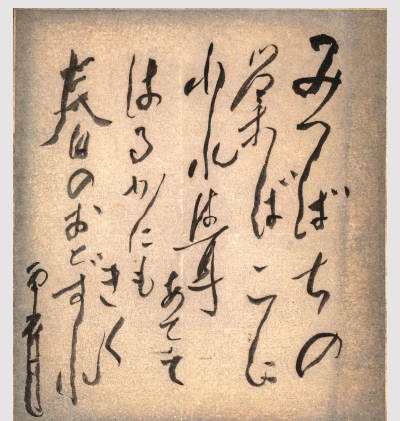
『北風の子』 理論社
昭和37年5月



鈴木喜代春 原稿

『おらは、岩木山になる！』

「じよつぱりの画家・奈良岡正夫物語」
一次稿



秋田雨雀 色紙

「みつばちの巣ばこにわれは耳あてて

はるかにもきく春のおとずれ」

秋田雨雀は『みつばちの子』に感激してこの歌を詠み、黒石の御幸公園にはその歌碑が建てられました。